学　位　論　文　審　査　要　旨　　公開審査日 2017 年 2 月 22 日（水）

報告番号：甲　第　1713　号		氏名：　大野　浩太郎	
論文審査担当者	主査　教授　井上　茂　印	副査　教授　河島　尚志　印	
		副査　教授　宮澤　啓介　印	

審査論文の題目：Associations among depressive symptoms, childhood abuse, neuroticism, and adult stressful life events in the general adult population

（一般成人におけるうつ症状に対する幼少期虐待、神経症的特質、成人期のライフイベントの関連）

著　者：Kotaro Ono, Yoshikazu Takaesu, Yukiei Nakai, Akiyoshi Shimura, Yasuyuki Ono, Akiko Murakoshi, Yasunori Matsumoto, Hajime Tanabe, Ichiro Kusumi, Takeshi Inoue

掲載誌：Neuropsychiatric Disease and Treatment (in press, 2016)

論文要旨：

【目的】虐待などの幼少期ストレスと成人期のうつ症状には強い関連が知られているが、その過程に、どのような媒介要因が存在するのかは十分に解明されていない。そこで、神経症的特質およびライフイベントの否定的評価に着目し、一般成人におけるうつ症状に対する幼少期虐待、神経症的特質、成人期のライフイベントの関連を検討した。【方法】対象は一般成人ボランティア 853 人で自記式質問紙による横断調査を行った。質問紙には Patient health questionnaire-9(PHQ-9)、short-scale Eysenck Personality Questionnaire-Revised(EPQ-R)、Child abuse and trauma scale(CATS)、Life experiences survey(LES)を使用し、共分散構造分析によって各要因の関連を検討した。【結果】有効回答は 413 人(48.4%)であった。幼少期の被虐待体験、神経症的特質及びライフイベントの否定的評価はそれぞれ直接的にうつ症状を悪化させた。また、幼少期の被虐待体験は神経症的特質を媒介要因として間接的にもうつ症状を悪化させた。さらに、神経症的特質はライフイベントの否定的評価を増強し、この経路を介して間接的にもうつ症状を悪化させた。【結論】幼少期ストレスの成人期のうつ症状及びライフイベントの否定的評価に対する２つの効果において、神経症的特質が重要な媒介要因である可能性を指摘した。これらの媒介効果を検討した研究はこれまでになく、本研究が抑うつの感情発生解明に寄与することが期待される。

審査過程：

１．先行研究と比較した本研究の新規性を説明できた。
２．神経症的特質と気質との関連と本研究の背景を説明できた。
３．共分散構造分析で得られた結果について適切に説明できた
４．一般成人から得られた結果としての解釈、および限界点についての適切な考察が行えた。
５．研究で調べられなかった遺伝要因等の他の要因の影響について適切に説明できた
６．本研究結果の診療への示唆について適切な説明がなされた。
７．うつ病あるいはうつ状態予防へ今後の展望について明確に説明できた。

価値判定：

本研究より、幼少期の被虐待体験が成人期のうつ症状の原因となるメカニズムとして、神経症的特質の形成やライフイベントの否定的評価が媒介していることが示唆された。うつ症状発症のメカニズムの解明、予防、診療に役立つ知見であり、学位論文としての価値を認めた。